

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

●不易流行

1961年、県立鎌倉高校3年の私は横浜国大建築学科の一次試験に合格し、二次試験に臨んだ。

面接で教授が「なぜ建築科を志望したのか」と問うた。「鎌倉の近代美術館に感動し建築家になろうと思った」の答に「美術館のどこが良いか?」と更に問われ「池と建物が良く調和している」と答えた。

17歳の答えが評価されたからか、合格した。

60年安保闘争後のキャンパスはニヒルな虚脱感が漂っていた。

建築学科は1学年・1クラス、40名だった。

横浜港の船内監視や家庭教師で稼ぎ、製図室と美術部の部室や学芸学部の美術学科の実習室に通い、ジャズ喫茶に入り浸り、クラスではデザイン志向が強く、最低限の単位数で卒業にこぎ着けた。

ここ2~30年、毎年、同窓会を開催している。

同窓生はデザイン志向が強い私が、修繕などの地味な仕事に専念していることに驚いていた。

「学生時代の姿からは想像できない」と言う。

なぜこの世界に踏み込んだのか?

「成り行き」と答える以外にないが、あえて言えば「建築の時間性」に魅かれた。

文学、絵画、音楽、彫刻などの諸芸術に対して建築は内部を持つ空間芸術とされている。

一方、1960年代、都市に人口が集中し、膨張・変化する状況で「永久不滅な建築」は否定され、建築は時間とともに新陳代謝するとするメタボリズム建築運動や思潮が主流となっていた。

卒業後、この傾向のアトリエに勤務し、東大の研究室で集合住宅の住まい方調査や研究をし、全共闘運動にのめり込んだ。

1987年に丹下健三会長のもと日本建築家協会(JIA)が結成された。集合住宅団地の維持管理・修繕を手掛ける仲間と説き合せ、日本建築家協会に集団で加盟した。

JIA・技術部会・メンテナンス分科会をつくり活動したが、建築家協会は1960年代のメタボリズム運動の様な、理念や熱気はなく、メンテナンス活動に対し、軽蔑する視線を送っていた。

「スクラップ&ビルの時代は終わった!」

JIAへのメンテナンス分科会の挑戦スローガンである。

当時、多くの建築設計事務所は、既存建物を壊しては建替え、建てたら建て放して、竣工後のメンテナンスに無



鶴岡八幡宮の境内に建つ神奈川県立近代美術館・鎌倉館
(現・鎌倉文華館 鶴岡ミュージアム)

関心であるばかりか、メンテナンスなど建築家がやるべきでないとする軽蔑感さえ持った建築家もいた。

建築家は、竣工後、建物が壊される迄のライフサイクルにこそ関わるべきである。

JIA支部の機関誌に2年間連載し、以下のようなメンテナンス分科会の主張を展開した。

- ・建築のライフサイクルコストと耐久性。
- ・世界・各国の新築とメンテナンス市場の比較。
- ・建築と各部位別の耐久性と修繕周期と性能保証。
- ・生活様式の変化と建物の社会的耐用年数。
- ・生活様式と建築の改修・リニューアルの方向。
- ・劣化調査と修繕計画・設計と長期修繕計画、など。

竣工から建築の死迄の「建築の時間性と建築家のかかわり」を示した。

メタボリズムの建築家運動の抽象的時間理念に対し、集合住宅の管理組合を対象にした具体的、実践的な建築の時間性を提示した。

これらJIAメンテナンス分科会の主張は書籍「マンション百科、建築家によるトータルメンテナンス」にまとめられた。これは、既存建物の修繕・メンテナンスに関する出発点となる書籍となった。

その後、この主張もあって、リフォームローンの普及、耐震改修促進法、省エネ助成金などストック社会が到来した。

「永久不滅の建築」から、「時の流れの中で生々流転し変化する建築」へ、建築の時間性は転換した。

松尾芭蕉の言葉に「不易流行」がある。

私の建築感覚は、転変する建物の一瞬に関わるもので、芭蕉の「流行」である。建物の経年劣化に対し修繕・改修を繰り返す中で「不易」とは何か?自問し続けなければ思っている。

みき・てつ

専門共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。

URD・建築再生総合設計協同組合・管理建築士。

建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかつた時代から「改修」に携わり、40年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたパイオニア。